

第7節 出雲における墳墓の変遷

ここでは神原神社古墳の意義を考えるにあたり、出雲における四隅突出型墳丘墓から古墳の時系列を土器編年に基づいて設定する作業を行いたい。

1. 四隅突出型墳丘墓の変遷

出雲において現在のところ、確実に四隅突出型墳丘墓が存在するのは草田3期（的場式）の段階である。草田3期（的場式）以降の四隅を三段階に分ける編年が見られるが、土器編年から見た場合はこれらの編年には大きな問題があるようと思われる。この時期の土器編年について概略を述べ問題点を指摘しておく。

弥生時代後期から終末期の土器研究については多くの論考があり、意義ある論争も行われてきた。研究史上における論点は現在でも解決したといえず、当然のことながら研究史を丹念に説き興していくことに大きな意味があることは言うまでもないが⁽¹⁾、紙幅の関係から詳細については今後の課題とし、ここでは現在の出雲地域の基準編年である草田編年を中心にして進めることとする。

土器変遷の枠組みを構築するには、草田4期⁽²⁾をどのように捉えるかが鍵になると思われる。草田4期とは口縁部に擬凹線を施さないか、それを撫で消すなど口縁外面が無紋になる最初の土器で、一見して草田3式（的場式）とは区別できるものである。しかしながら、基準資料となる長曾土墳墓C群SK06の注口土器は、口縁部の先端が尖り気味で付け根が厚くなる断面形態、間隔の狭い波状紋など草田3期の特徴をよく残している。鼓形器台も間内越1号墳や鍵尾A区1・3号墓のものは高さを保ち、筒部径がしまった形態は的場式とまったく変わることろがない。草田4期資料の形態・施紋の特徴は草田3期と共通する部分が多いこと⁽³⁾。草田4期の資料は絶対量が少ないとから草田4期単純期は短期間である可能性が高いこと。長曾土墳墓C群は草田3期から4期にかけて形成されており、中野美保1号墓⁽⁴⁾でも草田3期と4期の土器が伴っていることから、鍵尾土墳墓A区⁽⁵⁾のように草田5期との共伴例もあるが、墳墓の変遷を捉えるには草田3・4期で一つの段階とするのが有効と思われる。

四隅突出型墳丘墓の編年を見ると、渡邊編年（渡邊 1998）のIV期に該当する四隅はほとんどなく⁽⁶⁾、この編年が発表されてから他の時期の墳墓は増加しているが、この時期の墳墓は全く類例が増えていない。この段階は間内越1号墓があることから、草田4期にほぼ相当しているようである。とすれば渡辺IV期の時間幅は極端に狭くなってしまっており、次のV期が草田5・6期に対応し時間幅が広くなっている。つまり、IV期とV期の時間幅は著しく均等を欠いたものになっている。

土器によって四隅を編年するには、草田3期（的場式）・4期の段階と草田5期（6期の一部）の2段階で捉えることしかできない。草田6期はほぼ布留0式に併行しており古墳時代と考えてよく、大木権現山1号墓のみは草田6期の土器を伴うが、四隅はほぼ草田5期のなかで終焉を向かえていると考えてよい。

大型四隅の時代を2段階で考えた場合、前半は現在の出雲市・松江市・鹿島町・玉湯町・安来市など、各平野ごとに規模の差がありながら存在しているが、後半ではほぼ西谷墳墓群・荒島墳墓群に収斂される⁽⁷⁾。西谷墳墓群では墳墓群最大の9号墓を単独の立地で築造し、同一群内でもそのあり方は大きく変化している。これは両地域の首長に地域権力が集約されていったもので、首長の性

格も変化している可能性がある。

ところで、神原神社古墳のある斐伊川中流域では、四隅突出型墳丘墓の存在は知られていないが、弥生時代の墳墓群として神原正面遺跡群が知られている。しかしながら大型四隅の時代である草田3～5期の墳墓を欠いており、草田6期（布留0式併行期）になって方墳が築かれるようになる。近年調査された土井・砂遺跡でも同様に草田6期の方墳が知られているのみである。

2. 前期古墳の変遷

筆者はすでに草田6期の大半を布留0式に併行するとし、この時期には四隅に変わり方墳が出現することを明らかにした（松山 2000）。四隅の築造停止と布留0式と併行関係にあることから、草田6期の中で古墳時代が開始するものとする。前期古墳も土器を伴うものが多いことから、土器編年にしたがってその変遷を示し、古墳変遷の段階を設定することとする。

草田6期（いわゆる大木式⁽⁸⁾～小谷1式）

草田6期の土器を持つ方墳としては、社日1号墳、小屋谷1号墳、土井・砂1号墳が挙げられる。これらの墳墓の特徴は、葺石のない方墳、刳り抜き木棺、後漢鏡を破鏡として副葬する点などが挙げられる。土器はないが共通の要素を持つものとして古城山古墳（後漢鏡の破鏡ないし破碎副葬）などが挙げられる。また、小谷式の標識となった小谷古墳⁽⁹⁾もいわゆる弥生時代の小型仿製鏡を副葬しており、扁平にならず高さを持つ鼓形器台や二重口縁の台付き小型丸底壺などから、小谷1式として草田6期の中で捉えられる。神原正面北遺跡でもE-5号墳では草田6期の甕と布留式系の小型器台（模倣品）などが出土している。また、三田谷遺跡の2基の方形周溝墓はいずれも周溝から草田6期の土器が出ている⁽¹⁰⁾。

小谷2式

小谷2式の土器を出土する古墳としては神原神社古墳・大成古墳古墳があげられる。墳丘はやはり方墳であるが、長大な竪穴式石室・舶載三角縁神獸鏡の副葬など定型化前方後円墳の要素が導入される。小谷3式の古墳で舶載三角縁神獸鏡を副葬するものはないことから、八日山1号墳もこの時期の可能性が高いと考えられる。

小谷3式

小谷3式の土器を持つ古墳としては造山1・3号墳・寺床1号墳・松本1号墳・奥才13号墳などが挙げられる。この時期の特徴としては、墳丘はやはり方墳が主体で、前方後方墳がこの時期までに出現している。粘土櫛や礫床などの主体部が新たに加わる。副葬鏡は漢鏡7期の斜縁鏡が主体である。また、塩津山1号墓⁽¹¹⁾の中心主体に伴う土器は明らかに小谷3式であり、むしろ次に述べる3式後半の土器に類似している。

また、小谷3式を伴う古墳に斐伊中山2号墳がある、この古墳は円墳で、主体部は粘土櫛の簡略化されたもので仿製の細線式鳥紋鏡を副葬している。墳裾にあった大形甕は肩部にヘラ描波状紋を施す。現在の編年観では小谷3式ではあるが松本1号墳などより明らかに後出するものである⁽¹²⁾。やはり40mの円墳で長大な粘土櫛の主体部をもち仿製四神二獸鏡を副葬する上野1号墳でも、山本清が開地谷式（山本 1989）とする器台が出土しており、林（林 2001）が指摘するようにこのような器台が小谷3式の中で出現している可能性がある。このように小谷3式の後半には仿製鏡や円筒埴輪を伴った円墳が出現している。土器は出土していないが奥才14号墳⁽¹³⁾・月廻番外3号墳⁽¹⁴⁾が

同時期の可能性がある。

小谷4式

小谷4式の土器を持つ古墳として山地古墳・釜代1号墳がある。墳丘は円墳で、副葬鏡はいずれも仿製鏡である。山地古墳では筒形銅器が出土している。

まとめ

以上のように出雲地域の前期古墳の変遷は、草田6期の方墳出現の段階を1段階、小谷2式の堅穴式石室の出現、三角縁神獣鏡副葬の段階を2段階、小谷3式の前半の方墳を3段階とし、小谷3式後半から小谷4式の、仿製鏡を副葬する円墳を第4段階とする枠組みが設定できよう。また、この各段階と副葬鏡の鏡式がある程度対応する傾向を指摘できる。1段階は漢鏡4～6期の破鏡、2段階は舶載三角縁神獣鏡、3段階は漢鏡7期の斜縁鏡、4段階は仿製鏡である。鏡式の差が格付けの差とする考え方もあるが、鏡が副葬されるのはトップの階層だけで、同時期に副葬された鏡種は多くはないようである⁽¹⁵⁾。

出雲の前期古墳変遷の特徴としては、定形化古墳の属性出現前段階から既に方墳が出現しており、神原神社古墳は方墳第2世代ということになる。

墳丘については、鳥取県・兵庫県北部の日本海沿岸でもそれぞれの地域で三角縁神獣鏡が最初に副葬される段階までは方墳であり⁽¹⁶⁾、北部九州の方形周溝墓なども含めれば日本海側の広範囲の特徴とすることができる⁽¹⁷⁾。前方後方墳の中には松本3号墳・名分丸山1号墳など前方部が撥形を呈する2段階以前に位置付けられる可能性があるものや、普段寺1号墳のように三角縁神獣鏡を副葬するものがあるが、いずれにせよ方丘原理である。

また、大きな画期として小谷3式後半から墳形が円墳に変化し、一気に円丘原理へとシフトすることが指摘できる。この画期は大和の大王墓が東南部から北部に移るタイミングに重なり、福永が指摘する新式神獣鏡（福永 1999）や筒形銅器を副葬するものや大和北部型の円筒埴輪（高橋 1994）を伴うものがあることを考えると、中枢部の首長系譜変動に対応した変化と考えられる。

（松山智弘）

註

- (1) 草田編年（赤澤 1992）の登場以降の編年研究は新たな段階に入ったように見える。しかし、いまさらと思われるかもしれないが、鍵尾A区土器群や神原神社古墳埋納坑土器群の理解が、編年の枠組み設定の鍵になると考える。少ない資料を分けていく段階から、大量に存在する土器をいかにまとめるかという段階に至った現在、その答えは研究史を丁寧に追いかけることですでに出されているのではないだろうか。
- (2) 草田4期に相当する土器はこれまでの論考では以下のように扱われている。

花谷めぐむ編年（花谷 1987）

花谷の鍵尾A-5式として挙げた資料は、鍵尾A-5号墓の一部の土器を除いてすべて草田4期に相当する。花谷鍵尾A-5式はほぼ草田4期に対応すると考えてよい。草田5期のような土器は資料の不足もあり、認識されていなかったのかもしれない。

松本岩雄編年（松本 1992）

草田4期と5期をV-3として一括し、擬凹線の有無を大きな画期とする氏のスタンスがここでもとられている。

中川 寧編年（中川 1996）

- 赤澤が草田5期とする鍵尾A-5号墓の資料を、草田4期に相当するVI期吉相に上げている。VI期の設定についてはやはり擬凹線の有無を重視しているようである。
- (3) 的場土壙墓や西谷3号墓の中にもわずかであるが擬凹線がない個体がある。藤田氏の提言にもどるが、擬凹線の有無を重視することに意味があるのか再考する必要を感じる。この点については椿 真治氏（島根県教育委員会）から有益な助言を得た。
- (4) 平成13年度の出雲バイパスの調査で検出された小規模な四隅突出型墳丘墓。島根県埋蔵文化財調査センター仁木 聰氏より御教示を受けた。
- (5) 鍵尾土壙墓群A区の土器について概観しておくと、草田4期を中心に（1号墓・4号墓）、草田3期と草田5期（5号墓の一部）の土器が若干含まれているようである。5号墓も草田4期と草田5期の一括である。つまり墳墓の中心時期は草田4期の遺跡であるが、なぜか草田5期の土器（山本1989 第16図1・6）だけが扱われてきた。この2点の土器を鍵尾A区の他の土器と分離し、草田5期に下がるとしてもその上限に位置し、枠組みの典型にはならない土器である。ただ単にどちらに入れるかではなく微妙な位置にある土器であるということが、かつての論争から学ばなければならぬことであったが、この点がその後の研究に生かされてこなかった。
- (6) 矢谷墳丘墓は向木見型特殊器台が出土していることから、IV期に位置づけられたと思うが、その他の山陰系土器はV期の墳墓のものと変わらない。
- (7) 丹羽野は『分布域は狭まり巨大墳丘墓も姿を消す。これらの事実は、全国的な地域統合の動きから出雲がはざれている』（丹羽野 1997）とするが、墳丘規模については西谷9号墓の存在から事実誤認であるし、分布域の縮小も地域内での統合が進んでいる証であり、これは全土的な動きに対応したものと考える。
- (8) 花谷編年の大木式としてあげている資料は草田6期を中心としているが、草田4期（青木A区SI04）から7期（玉作跡宮ノ上地区T5第16層）までの土器がある。
- (9) 小谷土壙墓とされているが、測量図から方墳の可能性が高い。
- (10) 三田谷1号方形周溝墓は周溝床面から弥生後期の土器が出土しており、調査者はこの土器が遺構の時期を示すとしているが（今岡 1999）、これらの土器はいずれも小片で、しかも草田1～3期の各時期のものが含まれており、かなり幅を持つ資料である。床面出土ということで埋葬後ただちに溝に入ったとすれば、このような小片であるはずではなく、これだけの時期幅も生じるはずがない。この床面の土器こそが混入品で、やや上から出ているが完形に近い草田6期の甕がこの墓に伴うものである。また、この甕の内面は赤色顔料が付着しており、朱ないしベンガラなどの容器として埋葬儀礼に使用された可能性が考えられる。また、もう1基の方形周溝墓周溝の床面付近からも同時期の完形の甕が出土しており、この二つの方形周溝墓の主軸はまったく同じ方向である。（なお、報告書における図の方位は誤りで、遺跡全体図の方位が正しいようである。）
- (11) 塩津山1号墳は墳丘形態が四隅突出型墳丘墓の伝統を残すとして、最古段階の古墳とする見方があるが（池淵 1997・渡邊 1999）、南東コーナー付近の施設は、対角線方向に伸びず、墳端に対して平行して伸びており、造り出しのような施設の可能性があるし、長く伸びる北東コーナーは近藤義郎が前方部で指摘する『隅角』（近藤 2001）と同じ構造と考えたい。寺床1号墳の北東コーナーも同様の構造であり、この二つの古墳は共通する礫床を備える主体部を持っており同時期の古墳と考えてよい。このように塩津山1号墳を最古段階に位置づける根拠は特に無いように思われる。
- (12) 集落遺跡でも蔵小路西遺跡A区自然河道出土の遺物のように小谷3式の中でも後出するような資料があり、将来的には細分ないし小谷4式に下げるなど、再編が必要となるかもしれない一群がある。
- (13) 奥才14号墳は13号墳に後出しているが、石棺の石材が接合関係にあることから2基は大きな時間差なく築造されたと考えられている。13号墳には小谷3式の壺棺が伴うことから、14号墳は小谷3式後半か小谷4式前半の時期と考えられる。
- (14) 月廻番外3号墳はその他の多くの主体部が礫床であるのにたいして、礫床を持たないことから、礫床盛行以前の時期である可能性がある。
- (15) 古墳変遷の各段階に鏡式が揃うと言うことは、配布元での管理が徹底しており、それぞれの被葬者というより一地域に対しある鏡式がまとまって配布され、地域内で再配布された可能性も考えられよう。

- (16) 第1段階のものとしては桂見2号墳、大田南2号墳、三角縁神獸鏡を副葬するものとして普段寺2号墳、森尾古墳があげられる。
- (17) 方墳という墳形が前方後円墳体制の下位の墳形であるのかどうかは、出雲だけでなく広範囲で考えていかなければならない。四隅から方墳へというような図式だけでは解決できるものではない。強烈な自己主張ではないにしても地域の自主的な選択であった可能性も考えられよう。

参考文献

- 赤澤秀則 1992 『講武地区県営捕縄整備事業発掘調査報告書5 南講武草田遺跡』
- 赤澤秀則 1999 「出雲地方前期古墳の系譜と階層性」『田中義昭先生退官記念文集 地域にねざして』田中義昭先生退官記念事業会
- 池淵俊一 1997 「方墳の世界」『古代出雲文化展』(図録) 島根県教育委員会
- 池淵俊一 1998 「第3章まとめ第2節反田古墳群の位置づけとその評価」『安来市門生黒谷I・II・III 一般国道9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書14』島根県教育委員会
- 岡村秀典 1999 『三角縁神獸鏡の時代』吉川弘文館
- 近藤義郎 2001 「前方部はどのように誕生したか」『前方後円墳と吉備・大和』吉備人出版
- 高橋克壽 1994 「埴輪生産の展開」『考古学研究』第41巻第2号
- 丹羽野裕 1997 「四隅突出型墳丘墓の世界」『古代出雲文化展』(図録) 島根県教育委員会
- 花谷めぐむ 1987 「山陰古式土師器の形式学的研究—島根県内の資料を中心にして」『島根考古学会誌』第4集 島根考古学会
- 林 健亮 2001 「第8章まとめにかえて」『上野遺跡・竹ノ崎遺跡 中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書9』島根県教育委員会・日本道路公団中国支社
- 福永伸哉 1999 「古墳時代前期における神獸鏡製作の管理」『国家形成期の考古学—大阪大学考古学研究室10周年記念論集』大阪大学考古学研究室
- 松本岩雄 1992 「出雲・隱岐地域」『弥生土器の様式と編年山陽・山陰編』木耳社
- 松山智弘 1991 「出雲における古墳時代前半期の土器の様相—大東式の再検討」『島根考古学会誌』第8集 島根考古学会
- 松山智弘 2000 「小谷式再検討—出雲平野における新資料から」『島根考古学会誌』第17集 島根考古学会
- 山本 清 1989 「山陰の鼓形器台と当代の墓制」『出雲の古代文化』六興出版
- 渡邊貞幸 1998 「加茂岩倉遺跡と四隅突出型墳丘墓」『加茂岩倉遺跡と古代出雲』雄山閣
- 渡邊貞幸 1991 「出雲」『前方後円墳集成』中国・四国編 山川出版社
- ※各遺跡の文献については、第21・22表を参照のこと。

第19表 出雲の主要前期古墳

古 墳	時 期	墳丘	壺	埴輪	櫛	棺	副 葯 鏡				
							小 仿	漢 鏡	三 国	三 角 縁	仿 製
加茂町土井・砂1号墳	大木式	10×10				U木		(破)内行			
八雲村小屋谷3号墳	大木～小谷1式	19×15	●			箱木		(破)虺竜			
松江市社日1号墳	大木～小谷1式	19×15	●		木櫛	U木					
東出雲町古城山古墳	大木～小谷1式？	20×20				U木		(破)内行			
安来市小谷古墳	小谷1式	15×15				箱木	●				
加茂町神原神社古墳	小谷2式	29×25	●	●	石室	U木			●		
安来市大成古墳	小谷2式	60×？		●	石室	U木			●		
松江市八日山1号墳	未調査	23×？							●		
安来市造山1号墳	小谷3式	60×50		●	石室	U木			仿	方格	
同 (第2石室)	小谷3式				石室	U木			方格		
安来市造山3号	小谷3式	38×30			石室	U木		斜神			
東出雲町寺床1号墳	小谷3式	33×21			U礫	U木		獸帶			
三刀屋町松本1号墳	小谷3式	方方50	●		粘櫛	箱木		獸帶			
玉湯町布志名大谷1号墳	小谷3式	23×18			U粘	U木					
安来市塩津山1号墳	小谷3～4式	25×20		●	石室						
同 (第3主体)					U礫	U木					
鹿島町奥才13号墳	小谷3式	23×19				箱石礫					
松江市月廻番外3号墳		23×23				U木		盤龍			
鹿島町奥才14号墳		○18				箱石礫			方格		内花
宍道町上野1号墳	小谷3～4式	○40		●	粘櫛	U木					神獸
木次町斐伊中山2号墳	小谷3式末	○			U粘	U木					細鳥紋
出雲市山地古墳	小谷4式	○24				箱木					神獸
同 (第2主体)	小谷4式	○24				箱木礫					珠紋
安来市五反田1号墳		○25		●	石室						珠紋
松江市大垣大塚	未調査	○53		●							

墳丘 方方 (前方後方墳)、○ (円墳)、その他は方墳／櫛 石室 (竪穴式石室)、粘櫛 (粘土櫛)、U礫 (断面 U 字の礫床)、U粘 (断面 U 字の粘土床)／棺 U木 (木棺底の断面が U 字)、箱木 (箱式木棺)、箱木礫 (箱式木棺で床が礫床)、箱石礫 (箱式石棺で床が礫床)／副葬鏡 破 (破鏡ないし破碎副葬)、内行 (内行花紋鏡)、方格 (方格規矩鏡)、虺竜 (虺竜紋鏡)、盤竜 (盤竜鏡)、獸帶 (上方作系浮彫式獸帶鏡)、斜神 (斜縁神獸鏡)、細鳥紋 (細線式鳥紋鏡)、珠紋 (珠紋鏡)

第20表 出雲地方弥生墳墓・前期古墳一覧表

-249-

土器編年		斐伊川中流域	出雲平野	宍道湖南岸	宍道湖北岸	大橋川流域	安来平野
草田1		弥生後期 前葉			友田		
草田2 (九重)		中葉	神原正面北 C11・12号				
草田3 (的場)		後葉		西谷 1・2・3・4 中野美保	布志名大谷 小廻	来美	仲仙寺9・10
草田4	庄内式					閑内越	
草田5 (鍵尾A5)		終末		6・9			
草田6 大木式		布留0式	古墳前期 初頭	土井・砂 1号■ E4・5号 ■ ■ 松本3	神原正面 7号■三田谷■ 56■ 62■ 名分丸山	奥才 社日1■ 小屋谷■ 62■	大木 下山 安養寺1・2・3 宮山4
1	小谷1式			4号■ 6号■ 神原神社■		57■ 八日山■	大成■ 吉佐山根■
2	草田7 小谷2式	布留1式	前葉				
3	小谷3式	布留2式	中葉	3号■ 斐伊中山2● 松本1■	大谷1■ 13■ 上野1● 14●	寺床■	造山1■ 造山3■ 塙津山1■ 五反田5■
4	小谷4式・ 大東式	布留3式	後葉		山地●大寺● 12■ 金代1● 大垣大塚●		五反田1●
5	大東式		古墳中期				